

シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第40回) 「日本のイノベーションモデル」をイノベーションする

イノベーション推進本部 審議役 おかだ みちや 岡田 道哉

モノづくりへのこだわりとオープンイノベーション

「技術で勝ってビジネスで勝つ」これが戦後のわが国経済を支えてきた日本のモノづくり産業の勝ちパターンでした。独自技術への強い「こだわり」と優れた製品は、圧倒的な高品質で市場を席卷してきました。しかし、2000年代以降、海外企業は「技術で勝負せずにビジネスモデルで勝負する」新たなオープンイノベーション戦略に転じ、わが国産業は優位性を失ってしまいました。結果として、独自技術へのこだわりは、強みではなく弱みであると考えられるようになりましたが、私は、日本企業の「技術へのこだわり」は、日本の文化であり、日本のモノづくりの基盤であると考えています。つくばイノベーションアリーナ(TIA)では、パワーエレクトロニクスに関するオープンイノベーション拠点の構築を2009年に開始しました。当初、海外で広く行われているオープンイノベーションの方法論を中心に、産業界と幾度も意見を交換しましたが、議論を重ねるほど違和感が増しました。手本とした海外のオープンイノベーションモデルは、「自前主義」を否定すると同時に、「技術へのこだわり」をも捨て去ることを求めるため、日本人にはなじまなかったのです。産業界と1年以上かけて対話するなかで、日本に適したオープンイノベーションとは「技術へのこだわりを互いに認め合うこと」ではないかと考え、制度設計に反映させました。その結果、2012年4月に、民間企業14社と産総研で合意が成立し「つくばパワーエレクトロニクスコンステレーションズ(Tsukuba Power-Electronics Constellations, TPEC)」を発足することができました。TPECはパワーエレクトロニクスに関するオープンイノベーション共同研究体ですが、同時に(少しだけ)、「技術へのこだわり」を認めた新しい(日本型の)オープンイノベーションモデルです。

産業界、若手人材と研究者に魅力的であること

オープンイノベーション拠点は、「産業界が魅力に感じる」ことが大切ですが、加えて、「学生や若手研究者にとっても魅力的であること」が重要です。そこで、「毎夏、パワーエ

レクトロニクス・サマースクールを産総研で開催し、日本全国から熱意ある学生に集まってもらう」、「パワーエレクトロニクス大学院(連携・寄附講座)を筑波大学に開設し、産業界、大学と産総研が協力して人材を育成する場を作る」などの新制度を立ち上げました。これらの試みは、産業界、大学、学生と産総研の関係者の熱意なくしては進みません。持続的な拠点としての歩みは始まったばかりです。魅力を創出していくには、ユーザーの目線で企画し制度設計することがとても重要です。

イノベーションモデルを変える

科学技術立国を目指すわが国には、世界的なオープンイノベーション拠点が必要です。国の発展には「顔」となる国際空港の整備が必要であると同様に、強いモノづくり国家を目指すには、グローバル・オープンイノベーション拠点が必要です。産総研は、今後も世界が注目する研究成果を出し続けるとともに、自らがグローバル・オープンイノベーション拠点の中核をなしていくことになるでしょう。産総研はもっともっと進化することができます。日本の産業競争力を強化するには、日本の企業文化に適したイノベーションモデルへ再構築する必要があります。「日本のイノベーションモデル」をイノベーションする——その実現を夢見て今後も活動していきます。



サマースクールで学生にTPECについて講義する筆者